

財政問題を考える——ふたつの「錯覚」

第一生命経済研究所 特別顧問 佐藤 慎一

長らく、わが国の財政が巨額の赤字を出し続けていること、その累積赤字がとてつもない規模に膨らんできていること、これらは周知の事実である。実際、国の債務残高は名目GDPの2倍を超え、国際的にも凶抜けた姿だ。ここで疑問が湧いてくる。この累積財政赤字は今後どこまで増え続けるのか、この先問題は生じないのだろうか。かくて我々の多くは漠然と将来に不安を感じている。

では、この累積する財政赤字とは何か。ズバリ、「国」の借金である。その大宗は赤字公債が累積したものである。まだこの世にいない将来世代の返済を当てにして現世代が借金をしているという構図だ。将来世代にとっては、これは明らかに「負の遺産」だが、なぜこれが我々自身の切実な問題と感じられないのだろうか。全くの私見だが、ここで二点指摘してみたい。

第一点は、我々日本人の思考パターンに関わることだが、将来の状況を現在に引き直して認識するという意味での「逆算的発想」が乏しいのではないかということである。財政赤字が累積して将来世代にかなりの重荷（返済）を背負わせるとすれば、今のうちに打つべき手立ては何か、といった思考回路にはなかなかならない。むしろ、いずれそのうちに運が向いて何とかなるのではないかという希望的観測が頭をもたげてくる。ともすればこの問題は無限に先に送っていけそうな「錯覚」にすら陥る。結果として、我々世代は、知らず知らずのうちに「不作為」の罠に陥ってしまうのである。

もうひとつの点は、この借金が「国」のものであり、ともすれば我々自身の問題だと気づきにくいという点である。これがもうひとつの「錯覚」である。我々にとって「国」とは何か。私自身の漠然とした感じだが、我々の潜在意識には、「国」は我々の可視領域の「外」にある何か遠い存在という距離感があるのではないか。日頃はその実感が湧かないが、ひとたび何か事が起こると「国」というものを感じ

じるといだけの存在。だが、その実、「国」は、我々の生存を維持し生業を為すための砦であり、人と人とをつなぐソーシャル・キャピタルの塊であり、現世代と将来世代をつなぐ紐帯である。そして大切なことは、我々自身が「国」の構成員であり、担い手であり、いわば「国」そのものだということである。その意味で、財政赤字の累積という「不都合な真実」は、紛れもなく我々自身のものなのである。

ひとたび、こういう点に気づいてみれば、財政赤字の問題は、見て見ぬふりができないことは明らかである。そうだとすれば、ここで確認すべきことは次の点である。その一。借金は返さなければならないということ。いつまで待っても「ウルトラマン」という救いの手は決して現れないからである。その二。「タダ」はないということ。支払いが不足すればそれは必ずツケに回る。事の道理である。思えば「ペイ・ゴー原則」という言葉を聞かなくなって久しい。その三。ただ、借金は返さなければならないにしても、日本経済の実力からして、これを闇雲に行えば自ずと無理が生じるということ。経済を痛めつけては元も子もない。山より大きなイノシシ（税収）は出ないのである。大切なことは、経済を壊すことなく、しかも確実に累積財政赤字を減らしていくという長期的視点に立った主体的な取組みにしかと道筋をつけることである。もとより、これはかなりのナロー・パスだが、これこそが我々世代としての将来世代に対する重大な共同責任ではないか。

財政問題はともすれば「他人事」だが、実は「自分事」である。今こそ、我々世代が、「今を生きる世代」の責任において、この問題の本質を再確認し、改めてこれに対する粘り強い取組み（財政健全化）について広くコンセンサスを形成していくべき時ではなからうか。我々自身の漠然たる将来不安を払拭するためにも。

ともあれ、そろそろ、ふたつの「錯覚」からすっきりと目覚めようではありませんか。